

(第2日目)

兼子達夫

現地検討会事務局の方から感想文を書くよう申付かり、小生は不相応であるからと再三お断りしたわけですが、現地を見たまゝ拙文を記述するはめとなったので、先づ会員諸兄にお許を願う次第です。

第2日目(10月3日)は朝8時に紅葉の然別湖——標高800米に位置し周囲を白雲山、ペトル山等に囲まれた静寂そのものの自然湖——を出発し、途中電源開発の人造湖である糠平湖畔で小休止の後、上士幌町大規模草地へと向った。附近一帯は雄大な大雪国立公園の山並みであり、またガイド嬢の美声の案内もあって実に素晴らしい景観であった。

#### 上士幌町大規模草地育成牧場

この育成牧場は既に知られている通り、造成面積1,003haに及ぶ我が国最大級の草地であり、一帯の連山がグリーンの芝生のように整然と管理されており、そのスケールの雄大さに改めて驚異の眼を見張ると同時に、利用管理の緻密な計画性、一貫した作業体系等に強くひかれるものを感じた。

見晴しの良い丘陵地で会員一同はバスから降り、上士幌開建所長河本氏から造成経過について、また町職員鈴木氏から牧場の運営、草地管理等について詳細な説明を受けた。現況の概要は

- ・総放牧頭数 約800頭(月令別に若牛、18カ月前後、ハラミ牛、ポトクの4群に分けて放牧)
- ・総牧区数 68(1牧区2~3日滞在)
- ・放牧期間 5/14~10/18(158日間)
- ・日平均増体量 若牛 400~500g  
成牛 約800g
- ・追肥量 300Kg/ha(2回に分施)
- ・追播種子量 造成時の3%(毎春追播)

(牧草サイレージ2,800t、乾草800t調製)

等であり、これらに対する活潑な質疑応答が行われ、その後、新設の乾燥設備等を見て廻り、職員の方々の御厚意に感謝しつつ、次の見学先へ向った。

#### 北海道農協乳業株式会社

帯広市に近い音更町の国道沿いに白い近代的な工場が緑の芝生に囲まれて建っている。十勝酪農民自らの手によって設立された新工場であり、その二階の休憩室で昼食の後、会社調査役小西氏から概況の説明を聴いた。

この工場は昭和42年、十勝8農協が主体となり、北海道協同乳業KKとして発足したが、昨年10月北見地区根釧地区を含めた道東の農民工場としての構想のもとに北海道農協乳業KKと名が改められた。市乳、バター、脱脂粉乳の製造販売のほかに、東京方面へ市乳(原料乳)を日量2.5トン輸送販売しているそうである。衛生管理の行き届いた近代設備の工場内を見て廻った。

## 農林省十勝種畜牧場

同じ音更町に位置し、広大な面積を擁する十勝種畜牧場についても会員諸兄の周知するところであるが、今回は次の4カ所を見学し夫々の各課長さんから説明を聴き非常に有益であった。

### 1. ヘイキューブ生産状況（飼料課長三上氏）

流通粗飼料として最近注目されているヘイキューブの生産について、昭和46年オランダから導入したヘイキューパー（ファンデンブルグA A-25型）の性能調査、効率的な運用、使用原料草の種類と成形との関係等の研究を行なっている。

オーチャードグラス、チモシー等いね科牧草の細断された原料が絶え間なく乾燥ドラム内に入れられると、熱風により瞬間的に乾燥され、そして圧縮成形される。その乾燥ドラムの轟音は耳を聳さんばかりであり、また屋根上から噴出する水蒸気も瞬間乾燥の物凄さを印象づけるものであった。

ヘイキューブの生産費は原料草の水分、原料草の価格、運転時間等によって著しい差を生ずるが、1Kg当り30円以内で可能のようであり、如何にしてこれを低減できるかにかかっている様である。

### 2. 畜産経営技術課の概要（稲継氏）

十勝地方の立地条件に即応した新技術の開発及び体系化について研究が進められており、酪農係、肉牛経営係、草地係に分れて試験が行われている。

フリーストールバーンの乳牛舎、ミルクングパーラー、尿溜、スリラーポンプ、スリラープレッダー、その他草地用農機具等を見学し、質疑応答が行われた。

### 3. 原種生産・調製状況（種苗課長松本氏）

原々種圃20ha、原種圃175haの面積で飼料作物11品種の種子生産を行い、牧草関係では、アカクロバ<サッポロ>、オーチャードグラス<キタミドリ><北海道在来種>、チモシー<センボク><北海道在来種>、トルフェスク<ホクリョウ><ヤマナミ>の7品種の原種生産を実施している。種子収穫には2台の大型コンバインを使用している。

また種子精選調製機は小型のしかし精密な各種を揃えており、①エア・アンド・スクリーンセパレーター ②デスクセパレーター ③グラビティセパレーター ④ベルベット・ロールミル 等は興味深いものであった。その種子乾燥場及び種子乾燥用ビニールハウス、種子貯蔵庫を見学した。

### 4. 原種検定及び外国導入口種の適応性検定試験（原種検定課長本間氏）

上記の生産された牧草原種について、Breeder Seedとの比較検定、即ち後代検定試験をOEC D規定のもとに実施している。また外国導入口種の適応性検定試験も継続中であり、本年は特にアルファルファの生育が旺盛であり、標準品種（デュビュイ）より多収な品種としてEmeraldが目立ったそうである。

2日間に亘る有益な現地研究の全日程を無事終了し、種畜牧場内の広場に全員が集まり、三股副会長から閉会の挨拶を承り、最後に現地研究会事務局の及川部長（新得畜産試験場）、島田先生（帯広畜産大学）からも夫々責任感のあふれた挨拶をいただいたが、始終綿密な企画と行き届いた引率とに対して、参加者一同感謝の意を表しつつ午後5時に散会した。